

◆ 「いのちの歌」ふたたび ◆

このメッセージで何度か触れてきたけれども、第44回全国高等学校総合文化祭（2020こうち総文）のWeb上での開催がいよいよ10月末日を以て終了した。この過酷な状況の中、全国の高校生の芸術文化にかける想いを様々な形で発信していただいた関係の皆さんに感謝したい。本当にありがとうございました。本県からも、本校をはじめ多くの作品を紹介することができた。すでに動画は見るができなくなってしまうけれども、県立大洗高校マーチングバンド「BLUE-HAWKS」によるパフォーマンスは大変胸を打つものであった。

「マーチングバンド・バトントワリング部門」での参加であるが、7分38秒の動画のおよそ6割がメンバーによる無伴奏の歌唱である。

曲は、休校期間中、少しでも生徒の皆さんが元気になって欲しいと思って始めたこのメッセージの初めの頃に触れた[「いのちの歌」](#)。編曲は、「いばらき総文2014」でもお世話になった高野光章先生だ。

この歌唱を聞いていて、Ludwig van Beethovenのヴァイオリン協奏曲が思い浮かんだ。今年は彼の生誕250周年。様々なメディアで特集が組まれているので、何かしらの情報を目にした方もいらっしゃると思う。

とにかく温かなメロディーにあふれた曲である。特に第1楽章のcadenzaの後、弦楽器のpizzicatoに支えられながら一步一步かみしめるように主題が運ばれる箇所は本当に美しく、とても幸せな気持ちになる。



これも繰り返しなるけれど、「アートは人類の生命維持装置」とするモニカ・グリュッターズ独文化相の言葉が思い起こされる。「芸術の秋」である。生徒の皆さんには、様々なアートに触れてもらいたいと思う。「音楽会」は中止となったが、県の高等学校総合文化祭の[「美術展覧会」](#)が2会場で開催される。足を運んでいただければ幸いである。

さて、250年もの時を隔てて同じ気持ちにさせてもらえる「アート」。この素晴らしい宝物が身近にあること、改めて大切にしたい。